

強度行動障害に関わる専門援助職に求められること（2）

－ 学校・医療・行政・司法を含む関係機関との連携 －

企画者・司会者	笹田夕美子（浜松市発達医療総合福祉センター）
企画者・司会者	奥田 健次（行動コーチングアカデミー）
話題提供者	日野 浩志（徳島県立国府支援学校）
話題提供者	沓掛 英明（長野県青木村教育委員会）
指定討論者	柘植 雅義（筑波大学人間系）

KEY WORDS: 強度行動障害、反社会的行動、連携

【企画趣旨】 昨年度の当シンポジウムでは、現場で強度行動障害に向き合ってきた専門家を迎え、学校や施設における強度行動障害の事例をもとに、予防の観点から幼児期に何をしておくべきかという点に言及して議論を行った。その中で関係機関との連携が改善の転機となったケースの報告や低年齢からの福祉サービスや施設利用の必要性が指摘された。

自傷・他害等の激しい行動問題や反社会的行動が繰り返される場合、対象者が所属する学校や施設、家族の対応だけでは改善がみられぬまま、年々、行動問題がエスカレートして手におえなくなってしまう事例も少なくない。

行動問題が深刻なケースほど、家族や支援者も疲弊しており、ともすると虐待や不適切な支援や事故にもつながりかねないため、児童相談所や相談支援事業所、入所施設や入院治療が可能な医療機関、警察等、関係機関との連携が不可欠となる。しかしながら、他機関との連携は、担任や担当者の対応だけでは困難であり、組織としての方針の統一、コーディネーターなど窓口担当者の有する情報や連携の経験、連携先機関の窓口や担当者との方針の差異、福祉サービスの利用条件、入所や入院利用についての空床の有無、事例について情報共有の方法や役割分担など、障壁となるものが多数生じてくる。

そこで、今回のシンポジウムでは、関係機関との効果的な連携についての知見を共有するために、外部機関との連携が改善につながった事例から、各機関の利用のしかたや連携上のコツ、他機関の利用に際し障壁となるものと、障壁を越えていくノウハウについて議論をしたい。

なお、今回のシンポジウムでは、強度行動障害の定義を広く捉え、反社会的行動を呈し、関係機関の連携が必要となった事例も含めて議論の対象とする。

【話題提供 1：日野 浩志】 自閉症、ADHD、知的障害をもつ特別支援学校中学部 3年の男子生徒の事例を提示する。

事例の男子生徒は、他人との関わりを過剰に求め、相手の反応（返答、表情等）が気にいらないうきに激しい不適切行動（暴言、暴力、つば吐き、物を投げる等）が見られた。そこ

で、一人教室へ変更し、一人だけの休憩コーナーを設定するなど、一人で活動する時間を増やすことを目的とした支援を行なった。その結果、男子生徒は課題に従事する時間が大幅に増加した。学校での環境設定に加え、保護者が本生徒の不適切行動を積極的に改善したいと願うようになったため、病院との連携を図ることができた。男子生徒の主治医と相談し、学校で暴力があったときに入院できる体制を整え、男子生徒にも学校で暴力があれば入院手続きをとることを伝えた。その後、実際に、暴力に応じて入院した経験により、男子生徒の不適切行動の大幅な改善が見られた。当日は、実際の連携の方法、家族・学校内外の調整について具体的に報告する。

【話題提供 2：沓掛 英明】 教育委員会の取り組みとして、児童相談所、SSW、児童自立支援施設、警察署と連携した支援について話題提供する。知的障害、自閉症スペクトラム障害である特別支援学級の生徒が、両親の障害認知の低さから中学校2年生6月までは通常学級で過ごす。しかし、中学校2年生から不登校気味になり、2年時の冬には親の財布からお金を盗み、その後、器物破損、万引き、家宅侵入など問題行動が増える。警察・教育委員会・役場・SSW・スーパーバイザーと支援会議を重ねて、母親に育児能力がないとの判断したこと、また同時に保護者から施設入所の依頼があったことから、最終的に医療保護入院、児童相談所、児童自立支援施設に入所し、両親と離れて生活する環境を整える。現在は特別支援学校高等部で生活をしている。知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害の子供が、母親の本人の特性の受容が出来ていないこと、幼い時に十分な療育が受けられなかったために強度行動障害へと至ってしまった過程と市町村教育委員会が行った支援の過程を事例提供する。

【指定討論：柘植 雅義】 事例を踏まえ、学校・医療・行政・司法を含む関係機関との連携について、議論の口火を切る質問および見解を示す。

(SASADA Yumiko, OKUDA Kenji, HINO Kouji, KUTSUKAKE Hideaki, TUGE Masayoshi)